

「言葉を太らせたい」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 終業式の前には壮行会がありました

運動部員であれば誰もが憧れるのが全国インターハイの大舞台です。今年は 12 人の神高生がその舞台に立つこととなったため、壮行会も賑やかなものとなりました。

向かって左手には馬術部。静岡県で開催される第 60 回全日本高等学校馬術競技大会に団体で出場する女子チームです。メンバーは三寺希実さん、田中櫻さん、石川英稀さん、近藤花音さん。また、北海道で行われる第 37 回全日本高等学校馬術選手権大会の個人戦にも出場を果たす三寺さんは全校生を前にして誓ってくれました。『感謝の気持ちを忘れずに、馬と一緒に一戦でも多く勝ち進めるよう、頑張ってきます』と。力強いですね。



右手には山岳部。兵庫県開催となった第 70 回全国高等学校登山大会に男女アベック出場をします。男子のメンバーは高橋薫正くん、小谷溪介くん、玉置哲平くん、大須賀篤人くん。女子は石井瑚春さん、折原凜音さん、川畑美清さん、西崎心優さん。高橋くんは『山登りは自然と笑顔になれる競技です。地元代表として笑顔を忘れず、「山登りが好きだ」という気持ちも忘れずに登ります』といつもの笑顔で宣言してくれました。



応援団のエールも新体制となって初めてのものとなりましたが、非常によく響く団長の声と、全員のきびきびした動きで、いい初舞台を踏むことができたと思います。

さて、終業式の式辞、今回は何を話すか、悩みました。過日、校長室に遊びに来た 3 年生に聞かれていたのです。「先生、今度は何の話をしてくれるんですか」って。聞いてもらってないと切ないですが、楽しみにしてもらえると緊張します。だからいつも思います。1000 人を超える友人たちの前でマイクを持てる自治会メンバーは凄いなって。

いろいろと悩んだ末に私はいつもとは毛色の違う話をメインに据えることにしました。

『僕の生まれた家は決して裕福ではありませんでした。「欲しい」ものを「欲しい」と口にできる環境ではなかったのです。それでも一つだけ、「欲しい」と言えば殆ど買ってくれたものがあります。それは本でした。

人と人は言葉で繋がっていく、それならば言葉が豊かであればあるほど人は人と繋がりがやすくなり、人生はより豊かなものとなる。両親は心からそう信じたようで、僕に数多の本を、そして結果として数多の言葉を遺してくれたのです。その恩恵を受けた僕はふたりの子どもに対して、両親の思いを繋ぐことにしました。幼い頃から子どもが「欲しい」と言った本は迷わず買い与えてきたのです。ふたりの本棚は数多の本でいっぱいになりました。残念ながら、僕が子どもたちに伝え遺すことができたのはそれだけかもしれません。

ちなみに先日、兄貴である上の子とご飯を食べる機会がありました。すでに社会人となり、僕とは別の人生を、自分の足で歩み始めたところです。ちょうど彼の誕生日の直後だったので、僕は「本をプレゼントしようか」といつもと同じように口にし、ふたりで書店に行きました。やがて息子は本を 2 冊選んで来ました。

1 冊は仕事上で必要な資格取得に備えるための本。そしてもう 1 冊は小説。その題名を見て僕の頬は緩みました。それはほんの 1 週間前に僕が購入した本と同じものだったからです。結局、そういうところが似てしまうのですかね。僕らは顔を合わせて笑いました。忙しい皆さんにも夏休みは時間に余裕がありますかね。できれば、これからの人生がより豊かなものとなるよう、「言葉を蓄える夏」にしてくれたら嬉しいですね。』

「終業式の先生のお話を聴き、私も本を買いに行きました」校長室を訪れた笹山先生が私に伝えてくれます。心から飛び跳ねたい気持ちになりました。そんなふうに聞いてもらえていることが、私はただ嬉しいのです。